

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	地中海域言語問題とその研究に対する私の関心 : 第4回地中海域言語研究会国際会議について
Author(s)	藤原, 与一
Citation	ニダバ , 1 : 21 - 28
Issue Date	1972-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00022866
Right	Copyright (c) 1972 Author
Relation	



地中海域言語問題とその研究 に対する私の関心

——— 第四回地中海域言語研究会国際会議について ———

藤 原 与 一

◇ は じ め に

地中海域に関する言語地理学的調査がおこなわれていることを、私は、野上素一氏の書かれたもので知りました。だいぶん前のことです。その後、日本学術会議関係の刷りものに、第三回地中海言語地図学コンGRESの通報が載っているのを、私は国語学会の理事会で見ることができました。

これに出席することのできなかつた私は、会期後に、その事務局へ、様子の問い合わせをしてみました。が、返事は来ませんでした。

それから年をへて一昨年(1970年)、思いがけなく、地中海言語地図学委員会から、第四回コンGRESへの招待状が来ました。(そのころ、『ORBIS』 Tome XIX, No1, 1970 に、私の「A Dialect-Geographical Study of the Seto Inland Sea Dialect of Japanese」が載り、同誌上に、地中海言語地図学委員会の事務長格のM. Cortelazzo氏の近著『Avviamento critico allo studio della dialettologia italiana, I, Problemi e Metodi』(1969)を紹介した、同委員会の会長格のM. Deanović氏の文章も載ったのでした。)

これを受けて、1971年4月、私は、ユーゴスラビアのドブロブニク(Dubrovnik)での会合に出かけたのでした。

◇ 第四回コンGRESの様相

今大会でとり立てられたテーマはつぎの二つです。(以下、翻訳に関しては、イタリア語学専攻の古浦敏生氏、フランス語学専攻の原野昇氏、エリザベト音楽大学のベルタニョリオ氏を煩わしました。所を得ませぬが、ここで三氏に厚くお礼を申し上げます。)

1. 地中海と他の海との接触、および植民地化の言語的問題
2. 地中海におけるRaguse(Dubrovnik)の言語的位置

通知では、なお、「会期中のどの日かの午前の部か午後の部か、一回は、A. L. M. (L'ATLAS

LINGUISTIQUE DE LA MÉDITERRANÉE) 編纂の方法論的、技術的問題に当てられ、意見交換、討議、場合によっては発表もおこなわれる。」とありました。 — 会期最終日の午後がこれに相当しました。(私も午後の二番目に発表させられたのでした。)

会は要するに A. L. M. を共同の大局目標としており、しかも、 — 第四回コンGRESSに関するかぎり —、個々人の研究発表は、かなり自由に、さまざまな題目をとりあげることができるようになっていました。

4月5日から8日までの会期に、56の研究発表がおこなわれました。 — 9日には、近くの島への一日遠足がありました。

委員会では、コンGRESSを、今後、二年に一回開催したい意向のようです。地中海域を問題として、このように、再々の研究会を重ねていけば、一方でしたいにできあがっていく地中海言語図巻に対する総合的な諸研究も、しぜんによく、もりあがることかと思われます。

◇ 地中海言語図巻

今回、会期のおわりうとするところへ、図巻第一分冊の大荷物がとどき、出席者はみなこれの配布を受けました。

第一分冊は、横長い、大型の帙装のものです。中に、縦39cm、横68cmの一枚ものの言語地図が26枚収まっています。この大部分が、風の名称の図と魚の名称の図とです。

図とは言っても、おのおのは、調査地ごとに、調査結果をそのまま印刷したものです。代理符号をつかった図ではありません。

調査地点数が少なく、黒海をも含めて全域に165地点がとられているだけですから、地図には一々の調査結果をそのまま印刷することが容易です。

上述の地点が、12カ年で調査されています。調査に当たったおもな人は31人です。

調査全項目は845でした。

調査の委細は省略します。これになにほどこかの問題がないではありません。

ともあれ、 — 三語族十六言語 — にわたる言語地図、言語図巻のきはじめているのは、注目すべきことでありましょ。ことに、その対象地域が地中海域であるのは、かねて瀬戸内海域を問題にしてきた私の、かくべつ興味ぶかく思うところです。

図巻第一分冊とともに、この研究の要録が、小冊子として発行されました。

◇ 私の発言内容

本文章の表題が、私の発表題目でした。大約、以下のようなことを申し述べたつもりです。(ペー

パーの仏訳は、はじめ原野昇氏がして下さり、ランス先生 — 当時、広大文学部の講師 — がそれをくわしく見て下さいました。)

* * *

I 私が地中海域言語研究に関心を持つ理由

I. 1. 私は、日本の全域を対象として、長年月、方言の調査研究にしがたってきて、その一つの特定制作業という考えで、近来、瀬戸内海域言語の方言地理学的調査をおこなっています。立案したのは1950年で、今日では、調査結果の地図化も進み、今、大版の精密言語地図500余枚ができています。

I. 2. 日本の瀬戸内海をごらん下さい。これは完全な内海です。(私は、この内海の中ほどにある、一つの島に生まれました。)瀬戸内海には、人の住む126の島があります。多くの有人島を内に抱いた内海として注目すべきものを、広く世界の地理のうえに求めますのに、一つにはたしかに、日本のこの瀬戸内海があげられると思います。

この瀬戸内海での、言語現象の種々のおもしろさが、早くから私の興味をひきました。

さて、この私が、「内海」域言語の研究という視点で、まなこを他方にくばった時に、早くも注目されたのが、みなさんがたの地中海でした。しかも地中海は、諸言語のあいまじって存在する多島の一大内海です。そこには、さぞかし複雑な言語現象が存在し、興味をよびおこしてやまない事態が、かず多く存在していることでしょう。私どもの瀬戸内海域は、一言語、日本語のもとでの方言相を示すのにとどまるものですが、それにしても、これまた、じつに複雑な方言分化現象を見せています。これと比照して、地中海域の言語状態を研究していったら、どんなにおもしろいことだろう、こういうことで、研究の相互交流をはかることができたなら、どんなに有意義なことであろうと、私はかねがね思ってきたのであります。

こういう考え・立場で、私は、みなさんの地中海域言語研究に、かくべつの関心を持っています。

II 一般言語理論の建設

II. 1. 私は、瀬戸内海域の諸方言状態を解明して、日本列島(島嶼群)の縮約ケースとも考えることのできる瀬戸内海域の、この特定の場で、日本語の生態と、そこに存する言語理法とを認識しようとしています。これには、ヨコにひろがっていく研究方向と、タテに深まっていく研究方向との両方が必要であり、かつ、その両者を正しく相関させ、ついに両者を合一させることが肝要であります。

私は、今までのところ、多く、エクステンシブな研究方向に力をそそいできました。すなわち、瀬

戸内海方言状態についての方言地理学的研究につとめてきたのであります。もっとも、私は、もともと、郷里方言のインテンシブな研究から出発して、瀬戸内海方言状態の全般に目を向けたのでから、おもな島々へのインテンシブな討究は、一方で、つねに心がけてきました。近来は、諸氏の協力を得て、10以上の諸島につき、深い調査作業を完了してもいます。

が、今の研究主勢力は、『瀬戸内海言語図巻』(L. A. S.)の作成に向けられており、やがてアトラスの第一巻が上梓されるはこびです。

Ⅱ. 2. 目下の所産としては、方言地理学的研究の所産、アトラスが大きい所産となりますが、私は、すでにこの段階に応じて、やがて出版されるべきアトラスに即して、言語上の諸法則・諸理法、いわば一般言語学的理論を、なにほどか、どのようにか、帰結しうることを考えています。『瀬戸内海言語図巻』は、瀬戸内海において、日本語の生態を解さしめ、言語と生活文化との相関をとらえしめる文化図帖でもありましょう。すでに文化図帖と考えられるものからは、それ相当に、一般言語学的な理論をみちびき出すことができるはずです。

Ⅲ. 3. それにつけても、みなさんの地中海域からは、どんなすばらしい言語理論がみちびき出されることだろうかと、私は想像をたくましくしてやみません。なにさま、地中海域は、異なった、いく種類もの言語のいりまじる世界です。そこに、みなさんは、エクステンシブな研究、インテンシブな研究をくわえようとしていられるのでしょう。みなさんは、地中海という一大内海の特定期世界にあって諸言語のかもす複雑多岐な現象から、ヨーロッパの言語学を改新するにたる新しい理論的成果をみちびき出されるにちがいありません。

Ⅲ 「内海」の言語学的文化史的特性

Ⅲ. 1. 私が日本の瀬戸内海について考えてみますのに、島々を多く擁する「内海」は、それ全体として、一つの大きなまとまりを成すようです。たとえば「にわか雨」のことを言う方言呼称の分布を見ますのに、瀬戸内海域は、特定の語のまとまった分布を見せて、内海域全体がよくまとまり、そこに瀬戸内海域の特定性・全円性がよく見られるのであります。多島包擁の内海は、一般に、それとての特定性を持つにいたっていると言えます。

Ⅲ. 2. 考えてみますと、「内海」は、四周からものが流れこむ、大きなたまり場です。日本の瀬戸内海にも、四周から、いろいろのことは流入しました。島々について、四周からの影響が、濃淡とりどりに認められる幸いです。このような受け入れ圏であっただけに、年月とともに、内海は、おのずから、一定の文化圏になったことと思われるのであります。

Ⅲ. 3. 地中海はどんな様子でしょうか。私はすでに、予告された学会研究発表題目のうちに、言語・文化の交流の場としての地中海を云々される題目を見いだして、興味を深くしたのであります。

(注 学会では、その題目の発表者ビサニさんが、学会最後のセッションの司会者になられて、私も、そのビサニさんのあいさつを受けることができたのでした。)

日本の瀬戸内海も、まさしく、言語上、また一般文化上、古態温存の場所なのであります。—— 那样的、特性的地域であります。地中海は、文化の交換場所として、いかに特性的な場所であり、あったことでしょうか！—— 中の大小の島々が、おのおの、その南北・東西で、どんなにか、いろいろの役わりを演じたことであろうと思われるのであります。

Ⅲ. 4. 私は、瀬戸内海を、方言と文化全般との一大宝庫と見ています。これに対しては、方言地理学の討究方法も、よろしく発展的に、文化地理学的人間学的とならなくてはなりません。思えば、言語図巻は、当然、「文化」図帖となるべきものであります。

Ⅳ 言語伝播の理

Ⅳ. 1. 人の住む島が多く存在する「内海」では、四周の本土から島へ、また島から島へとことばが伝播していったこと、伝播していくことの、理論的説明が期待されます。「内海」上での、言語伝播の理というものが、興味ぶかく、さぐられます。

Ⅳ. 2. 本土から島へと、ことばが伝わる時、ことばが島に上陸したとなると、そのことばは、本土のとはいくらかちがったものになっていることがあります。島から島へとことばの伝わる時も、ことばは多少とも変わっていくことがあります。この変化は、おこるのが当然と言ってよいのかもしれませんが。本土と島との関係にせよ、島と島との関係にせよ、双方が海によって隔てられているということは、おたがいが強烈な一定条件によって境されているということでありまして、この分別法式により、相互間での言語伝播は、一種特定のなものとならざるを得ないと見られるのであります。

Ⅳ. 3. 日本の瀬戸内海では、じつは、一島内の沿岸諸部落相互間においても、方言の隔絶が顕著であります。—— (瀬戸内海域に限ったことではありますまい。南洋の島々においても、言語上、同趣のことが見られる由であります。) このような場合、言語の伝播はどうなったのでしょうか。思いますのに、集落ごとに、生活社会としての地域的個性がいちじるしくて、その個性—— 基質—— が、ことばの分布を受け入れるさいにも、強い反応をおこすので、このため、各集落は、あい近く存在していても、たがいに別異の相を呈することになったのだと思われます。

Ⅳ. 4. 島と島という関係の場合にも、同様の相互個性が認められましよう。それゆえ、言語の伝播は、海をこえるごとに、変容をおこすしだいなのだと考えられます。本土対島嶼の場合も同様であります。

海水による二地域分離の条件は、まことに、言語伝播を基本的に左右して、種々の飛躍的伝播を将来します。

Ⅳ. 5. 飛躍的伝播の舞台として、多島包擁の内海域は、おもしろい、特定海域をなすのだと、私は考えます。

V 言語変容・文化変容

V. 1. すでに私は、伝播上での変容を述べました。

V. 2. 日本の瀬戸内海で、島から島へと変容伝播を見せていって、さて、あい並ぶ島々の突端の島にいたっては、どのような言語変容が見られるでしょうか。そこでは、多くの事象をあわせ見た時、けっきょくは、変容がかくべつに大きいことが特徴視されます。私は、このことを、吹き通る風の比喩を以て説明したいのです。群がる島、たとえば数個の列島が、本土近くから遠くの海上へと並んでいるとしますか。この上を風が吹いて通ります。最後の突端の島は、風の吹きだまりの場所になります。(じっさいは、吹いて通りすぎますが、そこが比喩です。風が突きあたりの物かげに達しますと、そこで吹きだまり現象をおこします。)そこで、風は、旋風になって舞い上がったりします。つまり異変を呈します。こうなって、たとえば方言上の文アクセント(センテンスのイントネーション)にしても、列島の最後・突端の島は、それまでの島々とは相当にちがった、ふうがわりな曲調を示すことにもなるのであります。——これは、行きどまりの島での変移、特別の変容と見ざるを得ません。私は、従来、このような事実を、「辺境変移」と呼んできました。

V. 3. 突端の島では、そのような大変容の事実が見られますが、それにしても、言語の伝播が本土からこの列島へとおよぶ時、突端の島は、影響を受けることがもっともおそいのであります。この島は、その影響による変異という点では、他の島々の変異におくれます。しぜん、最後の島は、より旧の状況を残しとどめることになります。伝播は一般に変容伝播となりますが、伝播を受けないでとどまることの多い突端の島は、しぜん、旧状・旧態を存しがちであります。かくして瀬戸内海では、突端の島は、方言上の古態・古色をよく見せがちです。

V. 4. が、また、他方では、この突端の島は、他にかかわりなく、孤立して、ときに自己改変をおこして、事象の新化を見せることもあるのは注目すべきことです。新化・改新——特別な地理的事情のもとでの、そうした変容もあることを、私どもは認めなくてはなりません。

V. 5. 以上に述べた変容、言語上の諸変容は、文化——地方文化——一般のうえでも見られがちなことであります。

Ⅵ 日本語の地位と性格とについて

Ⅵ. 1. このさい、つけそえて、日本語そのものに論及してみます。日本語が、世界の諸言語の中で、形態上でも系統上でも、かなり孤立的であることは、すでに人々のよく知るところであります。

う。

なぜ、こう孤立的なのでしょう。私は、やはり、「辺境変移」の説以下の考えを以てこれを理解したいのであります。

Ⅵ. 2. 日本列島は、アジアの東辺の海上に、弧状をなして存在します。この国土へは、大本土から — その半島などから、さまざまの影響がおよんだことでしょう。今までの研究によれば、北方系の影響と南方系の影響とが認められます。早く原始日本語の成立期において、それらの影響が、日本国土上で、入りまじったと想察されます。そのような混血もすでに厄介な問題ですが、加えて、その後、外部諸方からの諸影響が、この国土で、いわば吹きだまり状を呈したことが、日本語の変異性・孤立性を大いに醸成することになったであろうと、私は考えるのであります。なお、突端辺境の日本列島では、さきに述べたような、突端部での変移後生（ — 新化の影響を受けることがおそくて）、孤立変容などもおこったことでしょう。これらのことは、また、歴史的に長くつづくことにもなったでしょう。日本語は、かくして、いよいよ孤立的地位のもの、かつ特殊性格のものとなりおわたかと思われるのであります。

Ⅵ. 3. ついでながら、イタリア半島につづく突端島、シシリー島の言語状態はいかかなのでしょうか。 — その北がわと南がわとは、どのような変差が見られるのでしょうか。つぎにまた、フランス本土の言語状態に対するコルシカ島の言語状態は、どんなぐあいなのでしょうか。ギリシャ本土の言語状態に対するキプロス島国のギリシャ語状態は、どのようになっているのでしょうか。

Ⅶ 研究の国際協力

Ⅶ. 1. くり返し申したように、「内海」研究は、そちらにもこちらにも成り立つことであります。規模の大小はしばらく別としますと、原理的には同種の研究作業が、そちらにもこちらにも成り立つこととなります。その数は、二つ以上でしょう。

Ⅶ. 2. 私は、類似作業間での国際交流・国際協力をつよく願望します。同似のことを発見して喜んでいる者同志、同じような研究障壁にうち当たって悩んでいる者同志が、たがいに研究を交換することは、新言語学の樹立のため、有意義なことであるにちがいません。私は、この席でも、みなさんから、多くの知識をいただきたいのです。

Ⅶ. 3. みなさんのご研究が、アトラスを目ざしていらっしゃることを伺い、私は、ことに、それに大きな関心をいただいています。私は、乏しい財のもとで、今しきりに瀬戸内海言語地図の仕上げにはげんでいますが、作っているのは、黒一色の符号図です。 — その様子の一部は、『ORBIS』の最近号によって、あるいはごらんいただけたかと思えます。

このように、言語地図製作に苦勞しているさ中でありますだけに、私は、みなさんが、地中海 —

諸言語のむらがる地中海域に関して、どのような図を作ろうとしてられるか、くわしくお伺いいたしたいのであります。理想的な言語地図・アトラスの製作のために、たがいに協力することの重要さを、お認めいただけますか。

Ⅶ・4. 今は、私は、自己の製図学的関心を以て、ひとえに、みなさんの『A. L. M.』の理想的な完成をお祈りしてやみません。

＊ ＊ ＊

◇ む す び

私は、こんどの学会でも、やはり、日本での“国語学”と“言語学”との一体化の必要を痛感しました。一体化されて当然と思われるのですが、じっさいは二つがはなれています。

しごとはおのおのの面や領域を持つとしても、学の根底には、双方に貫流するものが、つねになくてはならないのではないのでしょうか。言語の学として、人間のことばの学問、その生き生きとした学問として、両者は一体化せしめられてしかるべきだと思ふのです。

“国語学”での“実証”の方法・態度にしても、私どもは、これを、長い試練をへてきた“言語学”でのそれと考え合わせてみる必要があると思ひます。

(4 7 . 1 . 5)